

「銀河鉄道の夜」を読む (II)

A Study of Night Train to the Stars (Part II)

関口 安義
SEKIGUCHI Yasuyoshi

一 銀河鉄道の切符

第四次稿「銀河鉄道の夜」は、第九章に「ジョバンニの切符」の章を置く。すでに述べたように、この章は四〇〇字詰原稿用紙にして六十枚という分量で、それは一七八の章の合計枚数に匹敵する。テキスト全体を読みやすくするためには、章立てをしつかり示すことにある。が、「銀河鉄道の夜」の章立ては、実にあいまいだ。特に「ジョバンニの切符」の章は、他の章との分量上のバランスがとれない。このことも本作が未完成作品であることを自ら証しているようなものである。作者には本章を、否、全体の章立を整理し、すっきりさせるといふ願いがあったに違いない。

さて、列車は白鳥区の片隅にあるアルビレオの観測所に近づく。

銀河鉄道の旅が続く。アルビレオは白鳥座の β 座である。『大百科事典1』¹には、「夏の天の川のただ中、白鳥のくちばしにあたる星だが、星名の意味は不詳。小望遠鏡での観望に適した有名な二重星。オレンジがかつた3等星から約34秒離れてブルーの5等星が見える」とある。アルビレオにちなんだ「アルビレオの観測所」は、「黒い大きな建物」四棟^{むね}からなる。テキストから直接観測所について聞こう。

その一つの平屋根の上に、眼もさめるやうな、青宝玉^{サファイヤ}と黄玉^{トパーズ}の大きな二つのすきとほった球が、輪になってしづかにくるくるとまはってゐました。黄いろのがだんだん向ふへまはって行つて、青い小さいのがこっちへ進んで来、間もなく二つののはじは、重なり合つて、きれいな緑いろの両面凸^{うち}レンズのかたちを

つくり、それもだんだん、まん中がふくらみ出して、たうたう青いのは、すっかりトパースの正面に來ましたので、緑の中心と黄いろな明るい環とができました。それがまただんだん横へ外れて、前のレンズの形を逆に「繰」り返し、たうたうすつとはなれて、サファイアは向ふへめぐり、黄いろのはこつちへ進み、また丁度さつきのやうな風になりました。銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんたうにその黒い測候所が、睡ねむつてゐるやうに、しづかによこたはつたのです。

星座に關心の深かつた賢治は、ここに白鳥座の二重星をとりあげ、そこに「アルビレオの観測所」を置く。新たな物語の展開に備えるためである。南十字へ着くまでに起きる事件の序曲が奏されるのである。銀河鉄道にも車内では、車掌の検札がある。鳥捕りが「水の速さをはかる機械」について説明をはじめた時に、車掌が「切符を拝見いたします」とやつて来る。鳥捕りは、かくしから小さな紙きれを出す。カムパネルラも「わけもないといふ風」で、「小さな鼠いろの切符」を車掌に示す。ひとりジョバンニはあわてて上着のポケットに手を入れると、「何か大きな畳んだ紙きれ」があるのに気づく。「それは四つに折つたはがきぐらゐの大きさの緑いろの紙」とある。車掌は「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか」と問う。ジョバンニは車掌の間に、「何だかわかりません」と答えている。切符の内実は、すぐ後で明かされる。ここでは「いちめん黒い唐草のやうな模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したものでだまって見てゐると何だかその中へ吸ひ込まれてしまふやうな気がするのです」と説明されるのである。

カムパネルラの切符は、「鼠いろ」の切符であつた。それに対してジョバンニの切符は、「緑いろ」である。西田良子はこの色の違いに注目する。西田によれば「ひかりの素足」の中で、「死者の世界へはいり込んでしまった一郎は、「いつかからだには鼠いろのきれが一枚まきついてあるばかり」になつていたが、〈鼠いろ〉は、賢治にとつて、〈幽明境を象徴する色〉」であり、ジョバンニの切符の〈緑いろ〉は、「いのちのあるみどりの葉」を象徴する色という。他方、続橋達雄は、ジョバンニとカムパネルラの切符の色違いについて、「宗教的なつましいおももちの緑の瞳、前進してよろしいというシグナルの緑の燈、それに人びとの食欲をもみたす玉蜀黍の実をつつむもの（苞）などというふうに考えると、ジョバンニの切符に託されたものが、鳥捕りのことばだけではなくその色彩にも示されていることにもなる。これに対してカムパネルラの場合は、鉄道列車内部の色と同じでその列車の乗客にふさわしい」とする。

それは初期形の最後の部分に、博士の「さあ、切符をしつかり持つておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしに本当の世界の火やはげしい波の中を大腿にまっすぐに歩いて行かなければいけない。天の川のなかでたつた一つのほんたうのその切符を決しておまへはなくしてはいけない」とのことばにも重なる。ジョバンニの持つ「緑いろ」の切符は、カムパネルラの「鼠いろ」の切符でも、鳥捕りの「小さな紙きれ」でもなく、現実の人生を生き抜くための、なくしてはいけない切符なのである。

鳥捕りはジョバンニの切符を見て「おや、こいつは大したもんですぞ。こいつはもう、ほんたうの天上へさへ行ける切符だ。天上どこぢやない、どこでも勝手に歩ける通行券です。こいつをお持ちに

なれあ、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈でさあ、あなた方大したもんですね」と言う。どこまでだつて行ける切符には、大きな可能性が託されている。そして以後鳥捕りの、ジョバンニとカムパネラを見る眼は、「大したもんだ」というような様相を帯びる。次に「もうぢき鷺の停車場だよ」とカムパネラが向こう岸の、三つ並んだ三角標と地図とを見比べて言う。前章の最後に引用した鳥捕りへの同情は、ジョバンニの切符を介してのものであつたのである。

先にわたしは、「ジョバンニの成長が語られる箇所」と書いた。ジョバンニが他者を思いやる大事な箇所が、ここに見られるのである。ジョバンニが鳥捕りを気の毒に思ったのは、「鷺をつかまへてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくるくる包んだり、ひとの切符をびっくりしたやうに横目で見てもはて、ほめだしたり」するところにあつた。それはジョバンニが日常の生活で体験してきたことと、どこか重なる。現実の学校生活や家庭生活、さらには活版所でのアルバイトの体験から得た生きることの苦しみがあつての、他者への理解と憐憫である。「あなたのほしいものは一体何ですか」とジョバンニが鳥捕りに聞こうとすると、その姿は見えない。鳥捕りへの思いは、カムパネラとして同様のものがあつた。二人は鳥捕りについて語り合う。以下のようなようだ。

「あの人どこへ行つたらう。」カムパネラもぼんやりさう云つてゐました。

「どこへ行つたらう。一体どこでまたあふのだらう。僕はどうしても少しあの人に物を言はなかつたらう。」

「あゝ、僕もさう思つてゐるよ。」

「僕はある人が邪魔なやうに気がしたんだ。だから僕は大人へつらい。」ジョバンニはこんな変てこな気もちは、ほんたうにはじめてだし、こんなこと今まで云つたこともないと思ひました。

ジョバンニは、敬愛する友人カムパネラといつしよで、他者を思いやる心に満たされている。かつてわたしは「銀河鉄道の夜」を「少年ジョバンニの成長物語」と評したことがある。鳥捕りを案じるジョバンニは、「午後の授業」にいたジョバンニではない。自分だけの世界を守るのではなく、弱者である他者を思いやる少年がここにいる。「何だか苹果りんごの匂がする」というカムパネラのことばで、場面はまた転回する。「苹果の匂い」は後に展開する物語の伏線ともなる。「苹果」については、後でくわしくふれたい。

ここで、「俄にそこに、つやつやした黒い髪の六つばかりの男の子が赤いジャケツのぼたんもかけずひどくびっくりしたやうな顔をしてがたがたふるえてはだして立つてゐました。隣りには黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年が一ぱいに風に吹かれてゐるけやきの木のやうな姿勢で、男の子の手をしっかりとひいて立つてゐました」という語りが入る。続いて「あら、こゝはどこでせう。まあ、きれいだわ」という声がし、「青年のうしろにもひとり十二ばかりの眼の茶いろな可愛らしい女の子」が、「黒い外套」を着て青年の腕にすがつてゐる状況が語られる。男の子が「がたがたふるえてはだして立つてゐる」のが異常なら、「黒い髪」「黒い洋服」「黒い外套」と「黒」という冥界の闇を表す不吉な色の羅列も、悲劇の物語

の挿入を予告する。やがてその悲劇は、青年自身の口で語られる。長くながるが重要な箇所なので引用する。

いえ、氷山にぶつかって船が沈みましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急な用で二ヶ月前一足さきに本国へお帰りになったのであとから発つたのです。私は大学へはいってゐて、家庭教師にやとはれてゐたのです。ところがちやうど十二日目、今日か昨日のあたりです。船が氷山にぶつかって一ぺんに傾きもう沈みかけました。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かったのです。ところがボートは左舷の方半分はもうだめになつてゐましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となつて、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いてそして子供たちのために祈つて呉れました。けれどもそこからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とても押しつける勇気がなかつたのです。それでもわたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思ひましたから前にゐる子供らを押しのけやうとしました。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりはこ「の」ま、神のお前にみんなで行く方がほんたうにこの方たちの幸福だとも思ひました。それからまたその神にそむく罪はわたくし「し」ひとりです。よつてぜひとも助けてあげやうと思ひました。けれどもどうして見てゐるとそれができないのです。子どもらばかりボートの中へはなしやつてお母さんが狂気のやうにキスを送りお父さんがかなし

いのをじつところえてまつすぐに立つてゐるなどとてももう腸もちぎれるやうでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすつかり覚悟してこの人たち二人を抱いて、浮べるだけは浮ばうとかたまつて船の沈むのを待つてゐました。誰か投げたかライフブイが一つ飛んで来ましたが、滑つてずうつと向ふへ行つてしまひました。私は一生けん命で甲板の格子になつたところをはなして、三人それしつかりとつきました。

テクストには右の悲劇を何をもとにして書いたかは一切記入されていない。が、読み手には、すぐにタイタニック号事件を思い出させる。一九一二（明治四五）年四月十四日夜、イギリスのサウサンプトンからアメリカのニューヨークに向けて、処女航海中の豪華客船タイタニック号が、北大西洋を処女航海中、濃霧のためニューファンドランド島南方沖で氷山に衝突、翌日未明沈没したという事件である。乗船者二二〇八人中、一四九〇人（一説に一五二三人とも）が死亡した史上最大の海難事故である。それは宮沢賢治十六歳の時のことで、世界中に報道されたこの事件の衝撃は、若き賢治の心にも及んでいた。社会のさまざまな出来事に深い関心を示した賢治は、新聞や雑誌で、タイタニック号事件を知り、詳しく調べたのではないだろうか。

前後するが、黒服の青年は女の子に、「こわいことありません。わたくしたちは神さまに召されてゐるのです」と言い、男の子をジョバンニの隣に、女の子をカムパネルラの隣の席に座らせた。青年は姉弟に「わたし」「た」ちはもうなんにもかなしいことないので

す。わたしたちはこんないゝとこを旅して、ぢき神さまのどこへ行きます。そこならもうほんたうに明るくて匂がよくて立派な人たちでいっぱいです」と言い、男の子の濡れたような黒い髪をなでながら、これまでのいきさつを語ったのである。

青年は最後に「どこからともなく〔約三字分空白〕番の声が上がりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたひました。そのとき俄かに大きな音がして私たちは水に落ちました。もう渦に入ったと思ひながらしつかりこの人たちをだいてそれからぼうつとしたと思つたらもうこゝへ来てゐたのです。この方たちのお母さんは一昨年没くなられました。えゝボートはきつと助かったにちがひありません。何せよほど熟練な水夫たちが漕いですばやく船からはなれてゐましたから」と遭難現場の様子を告げて、語り終える。この箇所も報道されたタイタニック号の最後と重なる。賢治の詩「今日もまたしやうがないな」に、

いったい霧の中からは

こつちが見えるわけなのか

さよならなんていはれると

まるでわれわれ職員が

タイタニックの甲板で

Nearer my God か何かうたふ

悲壮な船客まがひである

とあるが、青年の語る言葉の中の「たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたひました」の歌曲は、英語の歌詞の *Nearer*

my God, to thee を想起させる。賢治は聖書はむろんのこと、讚美歌にもよく通じていた。*Nearer my God, to thee* の現行日本語讚美歌三二〇番、「主よ、みもとに近づかん」の歌詞の1番と5番を引用しておく。

1

主よ、みもとに 近づかん、

のぼるみちは 十字架に

ありともなど 悲しむべき、

主よ、みもとに ちかづかん。

5

うつし世をば はなれて、

天あまがける日 きたらば、

いよちかく みもとにゆき、

主のみかおを あおぎみん。

賢治は讚美歌の曲を踏まえた作曲をよく作つた。戯曲「饑餓陣営」の中に出て来る「饑餓陣営のたそがれの中」に付した曲など、ある種の讚美歌のメロディーに非常に近い。「主よ、みもとに近づかん」の歌詞と歌曲もよく知つて口ずさんでいたことであろう。タイタニック号事件のクライマックスを生かした青年のことばを聞いて、ジョバンニもカムパネルラも「いままで忘れてゐたいいろいろのことをぼんやり思ひ出して眼が熱くなりました」とある。「いままで忘れてゐたいいろいろのこと」とは、なにか。ジョバンニにとっては母の病氣や、学校生活のことや活版所でのアルバイトのこ

とや、いじめのことであったかも知れない。カムパネラにとつては、やがて明かされるザネリを助けて自らは溺死しなければならなかったことであつたかも知れない。そうしたことで、青年と姉弟の三人が、船の遭難事件の中であえて犠牲になつたことが重なつて、ジョバンニはひとり想いに沈む。ジョバンニの想い（心内語）は、次のように記される。引用文中の「パシフィック」は、アトラントックの間違いか。

（あゝ、その大きな海はパシフィックといふのではなかつたらうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗つて、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかつて、たれかゞ一生けんめいはたらいてゐる。ぼくはそのひとのさひはひのためにいったいどうしたらいいのだ「ら」う。）

続いて「ジョバンニは首を垂れて、すっかりふさぎ込んでしまひました」の地の文が来る。さらに「なにがしあはせかわからないのです。ほんたうにどんなつらいことでもそれがたゞしいみちを進む中のできごとなら峠の上り下りもみんなほんたうの幸福に近づくとあしづつですから」と燈台守の慰めのことばが続く。

佐藤泰正は「この場面の初期稿が「私のお父さんは、その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗つて、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかつて、僕に厚い上着を着せようとしたのだ」となつてゐることをみれば、この〈父〉が〈たれか〉という、より普遍的の他者と、その他者への痛み、また負い目という、新たな〈回心〉の機軸へと変化していることを見逃すことはできない。これはカム

パネラの先の〈母〉の幸いと許しをねがう問いから鳥捕りの男の話を経ての展開であり、この改稿自体の、そのモチーフの動きが注目されよう^⑤。と言う。確かに改稿によつて、ジョバンニの想いは、より普遍的な想いに深められている。

二 苹果のイメージ

さて、ここでテクストの中の苹果のイメージを、よりの確にとらえることにしたい。前述のように、首を垂れて「すっかりふさぎ込んで」しまつたジョバンニの前で、燈台守が「なにがしあはせかわからないです」と言い、「ほんたうにどんなつらいことでもそれがたゞしいみちを進む中のできごとなら峠の上り下りもみんなほんたうの幸福に近づくとあしづつですから」と姉弟と青年を慰める。「あゝ、さうです。たゞいちばんのさいはひに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです」と青年は「祈るやうに」答える。青年の信仰が高らかに謳われる箇所である。キリスト教でいう摂理を理解した者のことばである。それはこの後の〈ほんたうの神さまとは、どんな神さまか〉論争へとつながるものを持つ。

姉弟はいつかつかれて、「めいめいぐったり席によりかかつて睡つて」いる。「すきとほつた奇麗な風は、ばらの匂でいっぱいでした」という地の文に続き、燈台守が苹果を皆に勧める場面となる。ばらの匂いと苹果は、セツトになつてすでに用いられていた。背の高い青年が登場する寸前に、「何だか苹果の匂がする。僕いま苹果のこと考へたためだらうか。」カムパネラが不思議さうにあ

たりを見まはしました。／「ほんたうに苹果の匂だよ。それから野茨の匂もする。」ジョバンニもそこらを見ましたがやっぱりそれは窓からでも入って来るらしいのでした」とあった。

苹果は賢治テクストにはしばしば登場し、鮮やかな印象を留める。「氷と後光」(習作)など、その最たるものであろう。「銀河鉄道の夜」における苹果も、また、印象的で、テクストの〈読み〉に深くかかわっている。本作での苹果の最初の登場は、五の章「天気輪の柱」にあった。ジョバンニはわびしい気持ちを抱いて「黒い丘」に向かい、ひとり星の祭を築しむため頂上に立つ。その時汽車の音が聞こえ、列車が姿を現す。そこに苹果が登場する。「汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は、一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹果を剥いたり、わらったり、いろいろな風にしてゐると考へますと、ジョバンニは、もう何とも云へずかしくなつて、また眼をそらに挙げました」(傍線筆者)と出ていた。なぜジョバンニは「たくさんの旅人が、苹果を剥いたり、わらったり、いろいろな風にしてゐる」のを見て、「何とも云へずかなしくなつたのか。先走つた言い方になるが、わたしはここに語り手の背後にいる賢治の眼を感じるのである。ここに原罪のシンボルとしての苹果の扱いを見るのだ。「たくさんの旅人」は、罪ある人間であり、彼らが苹果を剥いて行為することを見て、悲しくなるというのは、人の世をしかと見据えた者にして、はじめて感じることに出来るものなのだ。

りんごは普通、リンゴ、もしくは林檎と記されるが、賢治は漢字の苹果の方を用いることが多い。『新宮澤賢治語彙辞典』には、「りんご」と仮名書きされる場合もあるが、漢字では「苹果」が最

も目立ち、「林檎」はまれである」とある。『大百科事典15』⁷⁾には、「リンゴは古くから知恵、不死、豊饒、美、愛などのシンボルとして知られ、そのことは神話や伝説の多くに反映している。旧約聖書ではエデンの園のアダムとイブが食べたとされる知恵の木の実としてのリンゴが有名であるし(ただし聖書にはリンゴと特定できる記述はない)、ケルト人は天国を「リンゴの国」と表現している」とある。「銀河鉄道の夜」の「苹果」は、前述のように透き通つた風が運んでくる「ばらの匂」とともにやつてくる。

ことごとごとごと汽車はきらびやかな燐光の川の岸を進みました。向ふの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈のやうでした。百も千もの大小さまざまな三角標、その大きなものの上には赤い点をうった測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集つてぽおつと青白い霧のやう、そこからかまたはもつと向ふからかときどきさまざまな形のぼんやりした狼煙のやうなものが、かはるがはるきれいな桔梗いろのそらにうちあげられるのでした。じつにそのすきとほつた奇麗な風は、ばらの匂でいっぱいでした。

「いかゞですか。かういふ苹果はおはじめてでせう。」向ふの席の燈台看守がいつか黄金と紅でうつくしくいろどられた大きな苹果を落さないやうに両手で膝の上にかゝへてゐました。

苹果は「黄金と紅でうつくしくいろどられた大きな」ものであつた。立派な果実である。賢治の育つた花巻地方は、昔からのりんごの生産地でもある。右の『新宮澤賢治語彙辞典』には、苹果を「詩

人の生活圏内の果実となつてはいるがそれがかえつて観念や想像力の産物と違つた根つきのある存在感を読者に与え、それでいて泥くささなどとは程遠い新鮮な感覚に輝き、香気を放つている」とある。

「銀河鉄道の夜」における苹果は、いかなるイメージをもつてテクスト中に存在するのか。大塚常樹は「ありうべき最も幸福な宇宙体系（個と全体との止揚）を表す、最高の〈銀河モデル〉⁸⁾」だとした。原子朗は「地上のものならぬ天国の苹果であり、というより球形の天上界そのものであり、地上の現象界を片割れとする宇宙の表象でもあろう⁹⁾」とする。

また、萬田務は〈賢治と苹果〉というテーマをめぐつての考察を行い、「銀河鉄道の夜」での〈苹果〉は、カムパネラとかほるの頬の色、青年たちが乗車してきたときの先ぶれの匂いの形容として、そして燈台守が手渡す実際の食物として、さらには、タダシの夢の中にもあらわれる。一作品の中にこれだけ多様に、しかも度々あらわれるのは、習作「氷と後光」を除くと他に類例をみない¹⁰⁾と言う。こうした見解はそれなりに意味を持つが、わたしの理解は、すでに若干ふれてはいるが、異なるのである。

先に『大百科事典15』の「リンゴ 林檎」の項を紹介したが、『旧約聖書』の「創世記」においては、アダムとエバが食べた果実と同一視されるのが、リンゴである。この果物は、原罪と深く関わる果物として存在するのである。すると、聖母子像によく見るイエスの手許にあるリンゴは、原罪からの救済を意味するのであろう。燈台守は、原罪の入口であり、同時に原罪からの出口、――救いを意味するものとしての苹果の役割を、十分知っていたかのようにある。だからこそ、それを皆に配り、慰めようとしているのである。

再び問う。賢治は「銀河鉄道の夜」に、なぜ苹果を登場させたのか。わたしは本作に「よだかの星」同様の原罪との闘いを読み取る¹¹⁾。その際にリンゴは、大きな意味を持つ。結論を急いではならないので、まずは以上のことを指摘・確認した上で、いましばらくテクストそのものを読み進めたい。

燈台守（燈台看守）の持つていた「大きな苹果」は、一個でなく複数個である。「両手で膝の上にかゝへていました」というのがそれを明かす。また、続くところで、「いや、まあおとり下さい」の勧めで、青年が一つとり、青年がカムパネラとジョバンニにも渡す。燈台守は眠っている姉弟の膝にもそつと置く。以下、苹果をめぐつて姉弟とジョバンニたちがどう反応するかを取り上げる。テクストに聞きたい。

にはかに男の子がぼつちり眼をあいて云ひました。「あゝ、ぼくいまお母さんの夢をみてゐたよ。お母さんがね立派な戸棚や本のあるとこに居てね、ぼくの方を見て手をだしてにこにこにこにこわらつたよ。ぼくおつかさん。りんごをひろつてきてあげませうか云つたら眼がさめちやつた。あゝ、こゝさつきの汽車のなかだねえ。」

「その苹果がそこにあります。このをじさんにいたゞいたのですよ。」青年が云ひました。「ありがたうをじさん。おや、かほるねえさんまだねてるねえ、ぼくおこしてやらう。ねえさん。ごらん、りんごをもらつたよ。おきてごらん。」姉はわらつて眼をさましまぶしさに両手を眼にあててそれから苹果を見ました。男の子はまるでパイを喰べるやうにもうそれを喰べてる

ました。また折角剥いたそのきれいな皮も、くるくるコルク抜き
のやうな形になって床へ落ちるまでの間にはすうっと、灰いろに
光って蒸発してしまふのでした。

二人はりんごを大切にポケットにしまひました。

苹果は、原罪と深く関わる果物というのが、わたしの考えである。先にも記したがアダムとエバがエデンの園で食べた果実は、「園の中央に生えている木の果実」であつて、リンゴとは表記されてい
ない。二人はそれを食べることで「善悪を知る者となつた」のである。「銀河鉄道の夜」を書いていた賢治に、「創世記」のこの記事が浮かんだのだろうか。ミルトンの『失楽園』をはじめ、禁じられた果実をリンゴと表記することも多かつたことゆえ、彼が苹果を原罪と関わる果物と見たとしてもおかしくない。

「銀河鉄道の夜」では、まず、男の子が「まるでパイを喰べるやうに」苹果を食べるのである。青年とかほとと呼ばれる姉も続いたことであろう。水難事故という割り切れない事件に遭遇し、彼らは必死に闘つた。そのことは前章に引用した青年の述懐からもうか
がる。もう十分だ。苹果を食することで救われたいとの願ひは、先の述懐と響き合う。

他方、「二人はりんごを大切にポケットにしまひました」とあるように、ジョバンニとカムパネルラは、ここでは苹果を食はずにいる。ジョバンニはでなく、「二人は」となつて注視していることに注視している。カムパネルラは、いまだジョバンニと共にいる。

三 蝸の火

汽車は「熟してまつ赤に光る円い実がいっぱい」の林や、「いちめん黄いろやうすい緑の明るい野原」などを通り過ぎる。森の中からはオーケストラベルやジロフォンにまじつて「何とも云へずきれいな音いろが、とけるやうに浸みるやうに風につれて流れて来る」のであつた。汽車のずうっと後の方から聞きなれた讚美歌の合唱が聞こえてくる。タイタニック号事件のイメージが浮かぶ。ジョバンニもカムパネルラも歌い出したとある。カムパネルラと隣に座つて
いるかほととが孔雀をめぐつて親しく話し合つてゐる。ジョバンニは「俄かに何とも云へずかなしい氣」がしてくる。

たくさんの鳥の飛ぶのを見て、かほととカムパネルラがずっと話しているのを前に、ジョバンニの心境は穏やかでない。ジョバンニの心内語を含んだ箇所を引こう。

(どうして僕はこんなかなしいのだらう。僕はもつとこゝろ
もちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずう
っと向ふにまるでけむりのやうな小さな青い火が見える。あれは
ほんたうにしづかでつめたい。僕はあれをよく見てこゝろもちをし
づめるんだ。) ジョバンニは熱つて痛いあたまを両手で押へるやう
にしてそちの方を見ました。(あゝほんたうにどこまでもどこでも僕
といっしょに行くひとはないだらうか。カムパネルラだつてあんな
女の子とおもしろさうに談してゐるし僕はほんたうにつらいなあ。) ジョバンニの眼はまた
涙

でいっぱいになり天の川もまるで遠くへ行ったやうにぼんやり
白く見えるだけでした。

ドヴォルザーク作曲の交響曲第九番ホ短調、「新世界交響楽」が
聞こえてくるのは、このすぐ後のことである。——汽車が小さな停
車場にとまる。「正面の青じろい時計はかつきり第二時を示しその
振子は風もなくなり汽車ももうごかずしづかなしづかな野原のなかに
カチッカチッと正しく時を刻んで行く」、その振子の音のたえま
を、遠くの野原の果てから「かすかなかすかな旋律が糸のやうに流
れて来る」のが、「新世界交響楽」であった。

テクストの読み手には、その第二章「Argo」がすぐ頭に浮かぶ。
日本では「家路」（遠き山に日は落ちて）などに編曲され、今日では
誰にもおなじみである。賢治には「春はまだきの朱雲を／アルペン
農の汗に燃し／縄と菩提樹皮にうちよそひ／風とひかりにちかひせ
り／四月は風のかぐはしく／雲かげ原を超えくれば／雪融けの草を
わたる……」の歌詞を、「第二章「Argo」につけた歌曲「種山ヶ
原」もあることは、心を和ませるこのゆつたりとしたメロディーに
惹かれていたのではないか。また歌曲の題名、「新世界」というこ
とばは、賢治にとってユートピアと重なり、それは宗教の問題とも
深くかかわっていたのである。

「新世界交響楽」は、「いよいよよはつきり」ジョバンニが、「コロ
ラドの高原」ではなかったかと思つたところの「地平線のほ
てから湧き」あがる。賢治の想像力は、新大陸アメリカの高原を縦
横に走り回る。——「突然たうもろこしがなくなつて巨きな黒い野
原がいっぱいにひらけました。新世界交響楽はいよいよよはつきり地

平線のはてから湧きそのまっくらな野原のなかを一人のインデアン
が白い鳥の羽根を頭につけたくさんの石を腕と胸にかざり小さな弓
に矢を番へて一目散に汽車を追つて来るのでした。」

インデアンの話に続き、天の川で魚をとる発破の話がくる。発破
とはダイナマイトの日本語訳であるが、この場合火薬で魚をとるこ
とをいう。当時毒もみと並んで流行つた漁獲法の一つだが、法律で
禁止されていた。が、法律を犯しても発破や毒もみを仕掛ける人
は、多かつた。一度に大量の魚が収穫できるからである。賢治テク
ストには、よく発破や毒もみのことが出て来る。日記体童話「さい
かち淵」には、子どもを目を通して見た発破漁のことが扱われる。
そこには「ぼくらが、さいかち淵で泳いでみると、発破をかけに、
大人も来るからおもしろい。今日のひるまもやって来た」とある。
法律を犯しても、川で発破をする魅力があつたらしい。魚は死んだ
り、おおくは気絶して、やがて生き返る。そのやり方は、大人も子
どもも魅せられたものらしい。

「毒もみのすきな署長さん」になると、発破と同様禁止されてい
た毒もみ漁法に凝つた警察署長が逮捕され、死刑になる話が描かれ
る。毒もみとは、谷川で山椒の皮汁などを流して、一気に大量の魚
を獲る漁獲法である。署長さんは毒もみ漁法の魅力にとらわれ、捕
まつて裁判にかけられ、死刑になる寸前にも「あゝ、おもしろかつ
た。おれはもう、毒もみのこときたら、まったく夢中なんだ。い
よいよこんどは、地獄で毒もみをやるかな」と言つたという。「銀
河鉄道の夜」には、発破の魅力が次のように記される。

その時向ふ岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水が

ぎらつと光って柱のやうに高くはねあがりどおと烈しい音がしました。

「発破だよ、発破だよ。」カムパネルラはこをどりしました。

その柱のやうになった水は見えなくなり大きな鮭や鱒がきらつきらつと白く腹を光らせて空中には抛り出されて円い輪を描いてまた水に落ちました。ジョバンニはもうはねあがりたいくらい気持ちが軽くなって云ひました。

川に爆薬を仕掛け、魚を獲るのは、心躍ることであつたのだ。自分はお出来なくとも、大人の仕掛けた発破のおこぼれにあずかつた、胸躍る少年の日の思い出、——それが天上を流れる銀河にも及ぶ。

さらに、「双子の星」の物語に重なるお星さまのお宮のことが話題になつた後、蝸の火のエピソードが語られる。ここは本テクスト中であつて、重要な箇所といえよう。人間の罪、原罪の問題が扱われるからである。次のような導入にはじまる。

川の向ふ岸が俄かに赤くなりました。楊の木や何かもまつ黒にすかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のやうに赤く光りました。まったく向ふ岸の野原に大きなまつ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗いろのつめたさうな天をも焦がしさうでした。ルビーよりも赤くすきとほりリチウムよりもうつくしく酔つたやうになつてその火は燃えてゐるのでした。「あれは何の火だらう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだらう。」ジョバンニが云ひました。「蝸の火だな。」カムパネルラが又地図と首つ引きして答へました。

川の向こうの赤い火、——「ルビーよりも赤くすきとほりリチウムよりもうつくしく酔つたやうになつて」燃える火、地図と首つ引きして調べるカムパネルラに女の子（かほる）は、このすぐ後に続くところで、「あら、蝸の火のことならあたし知ってるわ」と言う。ジョバンニの「蝸の火って何だい」という問に女の子は、「蝸がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聞いたわ」と言う。

蝸（ふつう「蠟」の漢字を当てる）は、節足動物蜘蛛形綱サソリ目の総称である。六〇〇種もあるという。体長は四〜六センチメートルのものが多く、先がハサミ状になつた大きな触肢と、腹部の毒針が特徴である。夜行性で昆虫を主食とする。「蝸の火」は賢治の蠟や蠟座への関心から来る。彼はその短歌に、「南天の／蝸よもしなれ魔ものならば／のちに血をとれまづ力欲し」「いささかの奇跡を起す力欲し この大空に魔はあらざるか」と詠んでいたほどだ。そう言えば初期作品「双子の星」にも蠟は登場し、大鳥と喧嘩をする暴れん坊の悪役として描かれていた。そういう「双子の星」物語は、読者周知の話とされ、ここにも登場する。語り手は「なんべんもお母さんから聞いたわ」と「女の子」に言わせている。その上で今度は、お父さんから聞いたという蝸の話が持ち出される。「銀河鉄道の夜」の蝸は、罪に目覚めた存在だ。

女の子は蝸を「いゝ虫よ」と言う。ジョバンニは博物館で見たと言ひ、刺されると死ぬつて先生が言つたと反論する。女の子は、「だけどいゝ虫だわ」と言ひ、次のような話をする。テクストからそのまま引用しよう。

むかしのバルドラの野原に一ぴきの蝸がゐて小さな虫やなんか殺してたべて生きてゐたんです。するとある日いたちに見附かつて食べられさうになつたんです。さそりは一生けん命通げて逃げたけどたういたちの押へられさうになつたわ、そのときいきなり前に井戸があつてその中に落ちてしまつたわ、もうどうしてもあがられないでさそりは溺れはじめたのよ。そのときさそりは斯う云つてお祈りしたといふの、

あゝ、わたしは今までいくつもの命をとつたかわからない、そしてその私がかんどのいたちにとられやうとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもたうとうこんなになつてしまつた。あゝ、なんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまつていたちと呉れてやらなかつたらう。そしてらいたちも一日生きのびたらうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにもなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかひ下さい。つて云つたといふの。そしてらいつか蝸はじぶんのからだがあつ赤なうつくしい火になつて燃えてよるのやみを照らしてゐるのを見たつて。いまでも燃えてるつてお父さん仰つたわ。ほんたうにあの火それだわ。

誰もが気づくように、ここには「よだかの星」のよだかの哀しみにきわめて近いものがある。

よだかは鷹にねらわれ、殺されようとしている時に、自分もまた小さな羽虫や甲虫を殺して生きていることを知るのである。よだか

は意識しなかつたが、罪を犯していたのである。彼は鷹から逃れ、彷徨するときに「口を大きくひらいて、はねをまっすぐに張つて」空を横切る。口を大きく開くことで、まず「小さな羽虫が幾匹も幾匹もその咽喉」に入ってくる。次に「一匹の甲虫が夜だかの咽喉にはひつて」もがく。一瞬置いて、また一匹の甲虫がのどに入り、ばたばたする。「よだかはそれを無理にのみこんでしまひましたが、その時、急に胸がどきつとして、夜だかは大声を上げて泣き出ししました」とある。三度の繰り返し的事象の後に来るものは、哀しい事実の発見であつた。それは「銀河鉄道の夜」の蝸の発見した哀しみに重なる。

よだかも蝸も自身を犠牲にし、光を放つ存在に転身することを願つた。見田宗介はそれを賢治の「焼身幻想」とした。けれどもその行為は、ロマンチックな想いを伴う「幻想」などという生やさしいものではない。

わたしはそこに「原罪からの脱出の願い」を見る。存在自身が罪という烈しい自己否定、——原罪意識に目覚めたことから生じたものである。具体的に言うなら生存との闘い、罪との闘いである。よだかはやり切れない現実の中で、原罪からの「解放」の願いを強く持つ。それが「灼けて死んでもかまひません」の叫びとなり、「解放」を求めて大空を彷徨する。

よだかは死をもつて、みにくい存在からの脱出を試み、「私のやうなみにくいからだでも灼けるときには小さなひかりを出すでせう」と言うのであつた。「よだかの星」の最後は、右に引用した「銀河鉄道の夜」の蝸の最後にきわめて近い。その場面对比の意味で引用しよう。

それなのに、ほしの大きさは、さつきと少しも変わりません。つくいきはふいごのやうです。寒さや霜がまるで劍のやうによだかを刺しました。よだかははねがすっかりしびれてしまひました。そしてなみだぐんだ目をあげてもう一ぺんそらを見ました。さうです。これがよだかの最後でした。もうよだかは落ちてゐるのか、のぼつてゐるのか、さかさになつてゐるのか、上を向いてゐるのかも、わかりませんでした。たゞこゝろもちはやすらかに、その血のついた大きなくちばしは、横にまがつては居ましたが、たしかに少しわらつて居りました。

それからしばらくたつてよだかははつきりまなこをひらきました。そして自分のからだがいま燐の火のやうな青い美しい光になつて、しづかに燃えてゐるのを見ました。

すぐとなりは、カシオピア座でした。天の川の青じろいひかりが、すぐうしろになつてゐました。

そしてよだかの星は燃えつゞけました。いつまでもいつまでも燃えつゞけました。

今でもまだ燃えてゐます。

女の子の語つた〈蝸の話〉と「よだかの星」とには、右に見たやうに共通項が多い。それぞれの主人公は、共に追い詰められた最後の段階で、それまで知らずして犯していた罪の深さにおののくのである。

二つのテキストを貫くものは、原罪との闘いである。蝸は「わたしはいままでいくつのものの命をとつたかわからない、そしてその

私がこんどいたちにとられやうと」してしていると言う。よだかは小さな羽虫や甲虫を殺して生きていたが、今、鷹に殺されようとしてゐるのである。共に哀しい、そして避け得ない現実であつた。それは芥川龍之介が「好色」〔改造一九二・一〇〕という小説で、「一体我々人間は、如何なる因果か知らないが、互に傷け合はないでは、一刻も生きてはいられないものだよ」と語り手を使って、登場人物に語らせたことばとも重なる。人間の哀しき性は、原罪を自覚すること、より深刻化する。蝸もよだかも原罪を知り、それからの解放を求めて羽ばたくのである。原罪を知ること、蝸もよだかも、はじめて「まことのみんなの幸のために」自身の命を捨てることが可能となり、「まっ赤なうつくしい火になつて燃えてよるのやみを照ら」すまでになる。

ここに作者宮沢賢治の思想を垣間見ることができよう。賢治は生きるためには、他者を傷つけないではいられないという現実を芥川と同様に把握していた。また、そうした苛酷な現実を越え、みんなが幸いになるにはいかにすべきかに心を砕いた人であつた。やりきれない現実から飛翔するには、どうしたらよいのか。彼はそれをいくつものテキストに昇華する。

蠟座は赤く光る。七月下旬の夕方、南の地平線近くに見えるS字形の星座である。「銀河鉄道の夜」では、二人の少年が「あれは何の火だらう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだらう。」ジョバンニが云ひました。「蝸の火だな。」カムパネルラが又地図と首つ引きして答へました」との対話を伝える。それに続く女の子の語る赤く輝く星にまつわる話は、本テキスト中、最も印象深いエピソードとなつてゐる。

四 「ほんたうの神さま」論争

「音なくあかるくあかるく燃える」うつくしいさそりの火を後に、銀河鉄道の列車は進み、サウザンクロス駅に近づく。「もうぢきサウザンクロスです。おりる支度をして下さい」という青年のこゝとばで、場面は一転する。サウザンクロスは南十字星である。四つの星が見事な十字架を描き、天の川の中に位置する。ここに銀河鉄道の一駅が設定されている。

「おりる支度をして下さい」という青年のこゝとばに反抗し、男の子は降りたがらない。青年と女の子は降りる支度をするが、男の子は駄々をこねる。その箇所をテキストから引用しよう。

「僕も少し汽車へ乗ってるんだよ。」男の子が云ひました。カムパネラのとりの女の子はそはそは立って支度をはじめましたけれどもやつぱりジョバンニたちとわかれたくないやうなやうすでした。

「こゝでおりないといけないのです。」青年はきちつと口を結んで男の子を見おろしながら云ひました。「厭だ。僕も少し汽車へ乗ってから行くんだい。」ジョバンニがこらえ兼ねて云ひました。「僕たちと一緒に乗って行かう。僕たちどこまでだつて行ける切符持つてるんだ。」「だけどあたしたちもうこゝで降りないといけないのよ。こゝ天上へ行くところなんだから。」女の子がさびしさうに云ひました。

こうした会話をきっかけに、「ほんたうの神さま」をめぐる論争がはじまるのである。「銀河鉄道の夜」の一大事な箇所である。年の行かない男の子ばかりか、ジョバンニも女の子も、互いに別れたくないのである。が、女の子は、「あたしたちもうこゝで降りないといけないのよ。こゝ天上へ行くところなんだから」と「さびしさうに」言う。ジョバンニと女の子と青年を交えた論争の箇所を引く。

「天上へなんか行かなくなつていゝぢやないか。ぼくたちこゝで天上よりもつといゝとこをこさえなければいけないって僕が先生が云つたよ。」「だつておつ母さんも行ってらつしやるしそれに神さまが仰つしやるんだわ。」「そんな神様うその神さまだ。」「あなたの神さまうその神さまよ。」「さうぢやないよ。」

「あなたの神さまつてどんな神さまですか。」青年は笑ひながら云ひました。「ぼくほんたうはよく知りません、けれどもそんなんでなしにほんたうのたつた一人の神さまです。」「ほんたうの神さまはもろんたつた一人です。」「あゝそんなんでなしにたつたひとりのほんたうのほんたうの神さまです。」「だからさうぢやありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんたうの神さまの前にわたくしたちとお会ひになることを祈ります。」青年はつゝ、ましく両手を組みました。女の子もちやうどその通りにしました。みんなほんたうに別れが惜しさうでその顔いろも少し青ざめて見えました。ジョバンニはあぶなく声をあげて泣き出さうとしました。

ここで使われている「天上」とは、「天の世界」、望みの世界である。キリスト教では一般に「天国」「天の国」と呼ばれる。賢治はしばしば善を行った死者が行ける理想の世界を「天上」と記した。よく知られる詩「永訣の朝」には、「どうかこれが天上のアイスクリームになつて」の一文も見られる。キリスト教でも「天上のエルサレム」といった言い方で「天上」を天国と同義語に用いる場合もある。要するに「天上」「天国」「天の国」は、諸宗教を超えた彼岸世界の超自然的望みの世界である。

ここでの「ほんたうの神さま」論争は、まずジョバンニとかほろと呼ばれた女の子との間でなされる。かほろはジョバンニたちと別れたくなかったに違いない。それだからこそ心を引かれながらも、「こゝ天上へ行くところなんだから」と「さびしさうに」言うのであった。それに対してジョバンニは、「天上へなんか行かなくなつたていゝぢやないか。ぼくたちこゝで天上よりもつといゝとこをこさえなけあいいないって僕の先生が云つたよ。」と返す。ここでジョバンニが言う「僕の先生」とは誰か。恐らくは「一、午後の授業」で星座の授業をした「先生」ではないだろうか。ひとり一人の生徒によく気を配って、納得のいく授業を展開していた「先生」である。カムパネルラやザネリ、そしてジョバンニの担任の先生といつたらよからうか。

が、文脈上の「僕の先生」が担任の先生としても、文脈の背景には語り手の、そして語り手を統御する作者の考える「先生」がいる。その「先生」は、一人でなく複数存在したように思う。多くの研究者がまず挙げるのは、国柱会創設者の田中智学である。智学への賢治の崇拜ぶりが、よく知られていたところからくる考えだ。他

方、三上満は、その一人にトルストイをあげる。三上は「天上よりもつといゝとこをこさえよう」と、時代をこえてジョバンニ（賢治）に教えてくれた「僕の先生」、それは疑いもなく、トルストイその人だったのである」という¹³。賢治のトルストイへの傾斜や、その生涯の共通項に思い至る時、トルストイは「僕の先生」に擬せられてよい。が、文脈を離れての「僕の先生」の探求では、「農民芸術の興隆」でトルストイと共に名が挙げられているシペングラ、エマソン、ロマン・ロランなども浮上する。さらには田中智学以外の法華経関係の指導者や、賢治と親交のあった元小学校教師のキリスト者斎藤宗次郎なども挙がつてくる。すると「僕の先生」は、広義には、賢治に影響を与えたこれら思想家であり、狭義には「午後の授業」に出て来る先生ということになろう。

かほろと呼ばれる女の子は、ジョバンニが「天上へなんか行かなくなつていゝぢやないか」と言ったのに対し、「だつておつ母さんも行つてらっしゃるしそれに神さまが仰おほっしゃるんだわ」と言う。女の子は、日曜学校で受けた天国の話を嘯おほみしめるようなような口振りで言う。ジョバンニには、そうした教条的な言い方が気に入らないのである。それゆえ「そんな神様うその神さまだい」ということばまで飛び出す。女の子も負けていない。「あなたの神さまうその神さまよ」と言い返す。ここに青年が立ち入り、あなたの神はどんな神かと、ジョバンニに笑いながら問う。それに対してジョバンニは、「ぼくほんたうはよく知りません、けれどもそんなんでなしにほんたうのたつた一人の神さまです」と答える。

ジョバンニはうまく答えられないものの、神は唯一人と信じているかのようである。が、「ほんたうの神さまはもちろんたつた一人

です」と青年が言うにもかかわらず、ジョバンニはいま一度、「あ、そんなんでなしにたったひとりのほんたうのほんたうの神さまです」と繰り返す。それに対して青年は、「だからさうぢやありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんたうの神さまの前にわたくしたちとお会ひになることを祈ります」と応じる。ジョバンニも青年も「ほんたうの神さま」は、唯一の神であることを言っているのだが、ニュアンスが若干異なる。

この「ほんたうの神さま」論争」に対して心理学者の河合隼雄は、両者の立場を認めつつ、「これは一神教か多神教かというレベルを超えて、光というか、誰をも包んでくれるような大きな存在、そういうものを何か言葉でうまく言いたい。ところが自分たちとこの青年の間にはこだわりがあつて」うまくいかない。けれども、「たったひとりのほんたうの神さま」には、賢治の言いたい、「表現したい絶対者の姿がよく出ている」とする。法華経もキリスト教も超えた絶対者の存在に、賢治は想いを馳せているのである。西田良子や武田秀美は、ここに「母性なるものの救い」の存在を説く。が、わたしはそうした母性をも越えた絶対者の存在を読みたい。テキストは「さあもう仕度はい、んですか。ぢきサウザンクロスですか」という青年のことばで、物語は新局面を迎える。別れの場面である。テキストを引用しよう。

あ、そのときでした。見えない天の川のずうつと川下に青や
橙だいだいやもうあらゆる光でちりばめられた十字架がまるで一本の
木といふ風に川の中から立つてかゞやきその上には青じろい雲
がまるい環になつて后光のやうにかかつてゐるのです。汽車

の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのやうにまっすぐに立つてお祈りをはじめました。あつちにもこつちにも子供が瓜に飛びついたときのやうなよろこびの聲や何とも云ひやうない深いつゝまじいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になりあの苹果りんごの肉のやうな青じろい環の雲もゆるやかにゆるやかに繞めぐつてゐるのが見えました。

「ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの聲はひゞきみんなはそのそらの遠くからつめたいそらの遠くからすきとほつた何とも云へずわやかなラッパの声をききました。そしてたさんのシグナル「や」電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになりたうたう十字架のちやうどま向ひに行つてすつかりとまりました。

十字架が天の川の「青や橙やもうあらゆる光」にちりばめられた姿で輝く。人々は祈りを捧げる。その内実は「子供が瓜に飛びついたときのやうなよろこびの聲や何とも云ひやうない深いつゝまじいためいきの音」と表現される。「銀河鉄道の夜」は、ここにキリスト教色に染め上げられた感がある。いや、すべての宗教を超えた世界である。ここに登場する人物も、——ジョバンニにしてもカムバネルラにしても、国籍を超えた名が与えられ、女の子や男の子や青年は、背後にタイタニック号事件を背負ったヨーロッパ人らしい存在である。

作中の地名もランカシャイ（ランカシャー）とかコンネクテカット（コネティカット）州とか、大きな海パシフィックやコロラドの

高原などが登場し、国際的である。ここに国際的宗教キリスト教が、大きな位置を占める。

「ハルレヤハルレヤ」の合唱の中に汽車はサウザンクロス駅に着く。「わたくしはあなた方がいまにそのほんたうの神さまの前にわたくしたちとお会ひになることを祈ります」と言った青年は、男の子の手を引き汽車を降りる。女の子はジョバンニとカムパネルラに「さよなら」を言う。ジョバンニも「泣き出したいのを」こらえ、「さよなら」とぶつきり棒に言う。汽車の中は半分以上も空いて、さびしくなる。汽車を降りた人々は、「つゝましく列を組んで」十字架の前の天の川のなぎさにひざまづいている。「天の川の水をわたってひとりの神々しい白いきもの人が手をのばしてこっちへ来るのを二人は見」る。キリストを思わせる人物がここに現れるが、汽車は動き出し、十字架は小さくなる。

「銀河鉄道の夜」は、背景も内実もキリスト教に深く染め上げられている。本作とキリスト教との関係に言及した論に、鈴木健司の「たった一人の神さま」というディレンマ かほると宣教師ミス・ギフォード¹⁸⁾がある。鈴木は「キリスト教の問題は「銀河鉄道の夜」を成立せしめる中心的モチーフであり、それは、仏教的世界観にもとづく「ひかりの素足」や亡妹を主題とした挽歌群といった、「銀河鉄道の夜」の先駆稿と呼び得る作品からは、導くことのできない要素なのである」とし、盛岡のアメリカ人宣教師ミス・ギフォードに注目する。そして賢治とミス・ギフォードとの英語での会話が、「銀河鉄道の夜」でのジョバンニとかほるとの会話に対応することを、手堅い手法で立証する。

賢治とキリスト教との関わりは、これまで佐藤泰正¹⁹⁾や上田哲らに

よって推し進められ、近年は遠藤祐の一連の賢治研究書²⁰⁾が、テクスト分析から賢治のキリスト教との関わりを掘り起こしている。わたしもまた多くの賢治テクストの背景にキリスト教の影響を認めつつ、「銀河鉄道の夜」の世界を捉えたいと考えている。賢治のキリスト教理解は、なまなかのものでなかった。近年の新資料、斎藤宗次郎²¹⁾「二荊自叙伝」上・下二巻の刊行は、賢治が斎藤宗次郎を通して、キリスト教の世界とくに深く関わったかを明確に物語る。今後は「二荊自叙伝」を無視して「銀河鉄道の夜」を語ることは怠慢のそしりを免れないであろう。

五 ジョバンニの成長

かほると呼ばれた女の子と、青年に手を引かれた男の子と別れたジョバンニとカムパネルラは、次のようなやりとりをする。テクストを引用する。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行かう。僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕の中からだなんか百べん灼いてもかまはない。」

「うん。僕だってさうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでゐました。「けれどもほんたうのさいはいは一体何だらう。」ジョバンニが云ひました。「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云ひました。

「僕たちしつかりやらうねえ。」ジョバンニが胸いっぱい新しい力が湧くやうにふうと息をしながら云ひました。

「あ、あすこ石炭袋だよ。その孔だよ。」カムパネルラが少しそつちを避けるやうにしながら天の川のひとところを指さしました。ジョバンニはそつちを見てまるでぎくつとしてしまいました。天の川のひとところに大きなまつくらな孔がどほんとあいであるのです。その底がどれほど深いかその奥に何があるかいくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えずつゝ眼がしんしんと痛むのでした。ジョバンニが云ひました。「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きつとみんなのほんたうのさひはいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行かう。」あゝきつと行くよ。あゝ、あすこの野原はなんたきれいだらう。みんな集まつてるねえ。あすこがほんたうの天上なんだ。あつあすこにゐるのはぼくのお母さんだよ。」カムパネルラは俄かに窓の遠くにきれいな野原を指して叫びました。

カムパネルラと二人になったジョバンニは、再び「ほんたうのさひはいは一体何だらう」とカムパネルラに問ひかける。カムパネルラは「僕わからない」とぼんやり言う。それに対しジョバンニは「僕たちしつかりやらうねえ」と「胸いっぱい新しい力が湧くやうにふうと息をしながら」言う。その時カムパネルラは「あ、あすこ石炭袋だよ。その孔だよ」と天の川のひとところを指さす。そこには「大きなまつくらな孔がどほんとあいてゐる」のである。

石炭袋、コールサックとは、南十字座にある暗黒星雲である。北

十字座近くのを呼ぶこともある。『大百科事典5』の記述に拠れば、「星間空間には一辺一〇〇mの箱の中に平均一個程度の星間塵がある。その大きさは0・1 μ m程度である。星間塵の密度が高くなると、後の星の光を弱めて隠してしまう場合がある。そのような場合を暗黒星雲と呼んでいる。コールサックでは、中央部では二〇等級以上の減光をするので星はまったく見えない」ということになる。テクストには「その底がどれほど深いかその奥に何があるかいくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えずつゝ眼がしんしんと痛むのでした」とある。大塚常樹は石炭袋について、「恐ろしい闇の比喩として登場している」とする。

そういう「恐ろしい闇」をジョバンニは乗り越えようとする。「闇」とは、松田司郎によれば「ジョバンニとカムパネルラ二人の少年を決定的に分け隔てる境界」なのである。ジョバンニは、「しんしんと傷む」眼を大きく見張り、進もうとする。「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きつとみんなのほんたうのさひはいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行かう」という積極的ことばは、それを示す。語り手はジョバンニの成長を語ろうとするかのようにだ。ジョバンニの求道の精神が、高らかに奏される箇所である。が、ジョバンニに同調し、「あゝきつと行くよ」と言ったカムパネルラは、次の瞬間、もう、その席にいない。そしてジョバンニは丘の草の中で目覚めるのである。

第三次稿（初期形三）では、ジョバンニが目覚める前にブルカニ口博士（黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の瘠せた大人）が、「いちばんの幸福をさがし」に行くがよいと話しかけ、以下のようにジョバンニの決心を促す文面があった。引用しよう。

「あゝわたくしもそれをもとめてゐる。おまへはおまへの切符をしつかりもつておいで。そして一しんに勉強しなけあいいい。おまへは化学をならつたらう。水は酸素と水素からできてゐるといふことを知つてゐる。いまはたれだつてそれを疑やしない。実験して見るとほんたうにさうなんだから。けれども昔はそれを水銀と塩でできてゐると云つたり、水銀と硫黄^{いおう}でできてゐると云つたりいろいろ議論したのだ。みんながめいめいじぶんの神さまがほんたうの神さまだといふだらう、けれどもお互ほかの神さまを信ずる人たちのしたことでも涙がこぼれるだらう。それからぼくたちの心がいゝとかわるいとか議論するだらう。そして勝負がつかないだらう。けれどももしおまへがほんたうに勉強して実験でちゃんとほんたうの考とうその考とを分けてしまへばその実験の方法さへきまればもう信仰も化学と同じやうになる。(中略)

「さあ、切符をしつかり持つておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしに本当の世界の火やはげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない。天の川のな「か」でたった一つのほんたうのその切符を決しておまへはなくしていけない。」あのセロのやうな声がしたと思ふとジョバンニはあの天の川がもうまるで遠く遠く遠く風が吹き自分はまっすぐに草の丘に立つてゐるのを見また遠くからあのブルカニロ博士の足「お」とのしづかに近づいて来るのをききました。

ジョバンニは「僕きつとまっすぐに進みます。きつとほんたうの

幸福を求めます」と力強く言い、天気輪の丘を走り降りる。ポケットの中には、「天の切符の中に大きな二枚の金貨が包んで」あった。ジョバンニは「博士ありがとう、おつかさん。すぐ乳をもつて行きませよ」と叫び、また走りはじめる。第三次稿(初期形三)をここに援用すると、ジョバンニの求道の歩みは、より鮮明となる。ジョバンニ少年の「ほんたうの幸福」を求めての歩みは、彼を大きく成長させる。

最終稿は、首尾照応を意識した結びになっている。テクストの完程度から言うと、第三次稿(初期形三)を上回る。最終稿の最後の場面は「ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむつてゐたのでした。胸は何だかおかしく熱^{あつ}り頬にはつめたい涙がながれてゐました」にはじまる。丘からは町が見え、「その光はなんだかさつきよりは熟したといふ風でした」とある。光の数が増したということだろう。天の川は南の地平線の上が煙つたようになり、蠟座の赤い星がきらめいている。ジョバンニは夕飯を食べないで待つてゐる母を思い出し、牧場の牛舎へと急ぐ。牛乳を受けないでジョバンニが、さつきカムパネルラたちがあかりを流しに行つた川の方へ行くと、女たちが七、八人ずつ町角や店の前に集まつて橋の方を見ながら、何かひそひそ話し合つてゐる。橋の上にはあかりがいっぱいである。

「ジョバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなつたやうに思ひました。そしていきなり近くの人たちへ「何かあつたんですか。」と叫ぶやうに」聞く。「こどもが水へ落ちたんですよ」と一人が言う。橋の上は人でいっぱい川は見えないほどである。ジョバンニは河原に降りて、級友のマルソに会い、カムパネルラが川に落ちたザネ

りを救い、行方不明になったことを知る。ジョバンニの哀しみは、「誰も一言も物を云ふ人もありませんでした。ジョバンニはわくわくわくわく足がふるえました」という描写によく示されている。時計をじつと見ていたカムパネルラの父である博士が、「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから」ときっぱりと言う。ジョバンニは思わず博士の前に駆け寄り、「ぼくはカムパネルラの行つた方を知つてゐます」と言おうとするが、のどが詰まつて言えない。博士はジョバンニを認め、「あなたのお父さんはもう帰つてゐますか」と問う。「いゝえ」とジョバンニが頭を振ると、博士は「どうしたのかなあ、ぼくには一昨日大へん元気な便りがあつたんだが、今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね」と言う。最後の一文は、以下のものである。

ジョバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでなんにも云へずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行つてお父さんの帰ることを知らせやうと思ふともう一目散に河原を街の方へ走りました。

この結末について萩原昌好は、なぜ賢治はこのような結末をジョバンニに与えたのかと問い、「カムパネルラとの別れによつて『ほんたうの幸せ』は、自分ひとりで見つけてこそ意味がある(中略)、ジョバンニに与えられたものは、地上に戻つて今病の床に臥している母親のために何があつても一生懸命に尽すことが使命であり、そこから「たったひとりのほんたうの神さま」を見つけること、とい

う命題なのである。だから手紙を待っている母親のもとへ一目散に帰るのである」とする。

ジョバンニの哀しみと悩みは、依然つきまとう。その悩みは果て知らぬものであることが暗示される。「いろいろなことで胸がいっぱい」の「いろいろなこと」とは、いじめっ子ザネリの身代わりとなつた親友の死、母の病氣、父のことなど、少年ジョバンニの回りに起こる出来事である。

悩みのない人生はない。「銀河鉄道の夜」一編は、孤独の少年ジョバンニが、あこがれの友カムパネルラと夢の世界で会い、ともに銀河鉄道の夜の旅をする。そこでのさまざまな体験、——友情・嫉妬・いじめ・弱者へのいたわり、ほんとうの幸せ、ほんとうの神さまの追求、自己犠牲などをめぐつて、考えを深めることで、彼は大きく成長する。が、本作は単なる成長物語ではない。テキストはジョバンニの哀歡を通し、読者に生きるとは何か、幸せとは何かを問うているのである。

注1 『大百科事典1』平凡社、一九八四年二月二日、六二二ページ。この項目の執筆者は、茨木孝雄である。

2 西田良子『宮澤賢治論』桜楓社、一九八一年四月二〇日、三六―三七ページ

3 続橋達雄『宮沢賢治少年小説』洋々社、一九九八年六月一日、七二ページ

4 関口安義「ジョバンニの哀歡——『銀河鉄道の夜』を読む——」『宮沢賢治』第一七号、二〇〇六年一〇月五日

5 佐藤泰正「賢治とキリスト教——『銀河鉄道の夜』再読——」『国文学

- 解釈と鑑賞』二〇〇〇年二月一日
- 6 原 子朗『新宮澤賢治語彙辞典』東京書籍、一九九九年七月二六日
- 7 『大百科事典15』平凡社、一九八五年六月二八日、七五〇ページ。この項目の執筆者は、谷口幸男である。
- 8 大塚常樹『宮沢賢治心象の宇宙論』潮文社、一九九三年七月二〇日、二五一ページ
- 9 原 子朗『賢治を解くキーワード 苹果(林檎・りんご)』『國文學5 月臨時増刊号、賢治童話の手帳』一九八五年五月二五日
- 10 萬田 務『銀河鉄道の夜』考―(筆畧をめぐって)―『国文学解釈と鑑賞』一九九三年九月一日、のち『銀河鉄道の夜』への一視点―(苹果をめぐって)―と改題、『宮沢賢治/自然のシグナル』翰林書房、一九九四年一月五日収録、一二六―一二三八ページ
- 11 関口安義『よだかの星』の世界 悪より救い出したまえの祈り―『キリスト教文学研究』第三号、二〇〇六年五月二二日、のち『賢治童話を読む』港の人、二〇〇八年二月二四日収録、五三―五四七ページ
- 12 見田宗介『宮沢賢治 存在の祭りの中へ』岩波書店、一九八四年二月二九日、一三二―一四四ページ
- 13 よだかの「原罪」からの解放の願いに關しては、注11参照
- 14 三上 満『明日への銀河鉄道 わが心の宮沢賢治』新日本出版社、二〇〇二年一〇月二〇日、三二―三五ページ
- 15 河合隼雄『瀕死体験と銀河鉄道』『國文學5 月臨時増刊号、賢治童話の手帳』一九八五年五月二五日
- 16 西田良子編『宮沢賢治を読む』創元社、一九九二年二月一日、二八〇―二八三ページ
- 17 武田秀美『宮沢賢治『銀河鉄道の夜』―「ほんたう」のテーマ―』『キリスト教文学研究』第一四号、一九九七年五月一〇日
- 18 鈴木健司『たった一人の神様』というディレンマ かほると宣教師ミズ・ギフォード』『宮沢賢治という現象 読みと受容への試論』蒼丘書林、二〇〇二年五月二五日、九一―一七七ページ
- 19 佐藤泰正『宮沢賢治とキリスト教―内村鑑三・斎藤宗次郎にふれつつ―』『国文学解釈と鑑賞』一九八四年十一月一日ほか
- 20 上田 哲『宮沢賢治 その理想世界への道程』明治書院、一九八五年一月一五日
- 21 遠藤 祐『宮沢賢治の「フアンタジー空間」を歩く』双文社出版、二〇〇五年七月二五日、『宮沢賢治の物語たち』洋々社、二〇〇六年一〇月二〇日、『イーハトヴへの招待』洋々社、二〇〇八年二月二〇日
- 22 山折哲雄・栗原 敦編、斎藤宗次郎『二荊自叙伝』岩波書店、上、二〇〇五年三月二五日、下、二〇〇五年六月二八日
- 23 『大百科事典5』平凡社、一九八四年二月二日、一一五二ページ。本項目の執筆者は、磯部瑠三である。
- 24 大塚常樹『銀河鉄道の夜』を読み解くキーワード石炭袋』『國文學』一九九四年四月一〇日
- 25 松田司郎『宮沢賢治の深層世界』洋々社、一九九八年二月二〇日、二四四ページ
- 26 萩原昌好『宮沢賢治『銀河鉄道』への旅』河出書房新社、二〇〇〇年一〇月二五日、二一九ページ